

越中八尾おわら風の盆にみる衣裳

○八倉巻 敬子 ・尾畑 納子 (富山女子短大)

<目的>越中八尾は、富山平野から飛騨の山脈にかかる街道に発達した町である。この地で行われる「越中おわら」は、古い伝統を持ち、元禄15年(1702年)頃から、二百十日の台風を避ける神事として、毎年唄・音曲に合わせて町内を総出で踊り回ったのが始まりとされている。現在もこうした伝統行事が引き継がれ、八尾町の中心部11町が各町ごとに異なる衣裳をまとって行われる。本研究では、こうした伝統行事で着用される衣裳に着目し調査を行った。

<方法>八尾町(・福島・上新町・下新町・東町・西町・東新町・西新町・諏訪町・鏡町・今町・天満町)に在住の男女を対象に1998年11月にアンケート調査を実施。調査内容は浴衣の柄や色・法被・帯・早乙女の衣裳についてである。

<結果>各町内ごとに工夫を凝らした演技が披露される競演会での衣裳を男女別に考察した。男性の衣裳は黒地の法被と黒の股引(八尾ではまたひきという)姿で、農作業衣を形どっている。そのため素材は木綿のイメージが強いが、実際には羽二重(絹100%)を使用していることがわかった。理由として柔らかい線を出すためと古くから養蚕が盛んであったことなどが考えられる。衿には町内名、背中心に町内の紋が入り腰回りには市松模様や桔梗、楓の模様が施され上下ひと揃いで約20万円は超す額になることがわかった。女性の衣裳は11町がそれぞれ独自の浴衣を持っている。衣裳の模様構成で最も多かったのは、「おわら風の盆」の歌詞が袖や腰あたりに染め抜かれているもので、地色はピンクや薄紫など明るい色が多かった。浴衣が町独自のものがあるのに対して帯については、喪服の帯を使用しているのが特徴である。家庭に常備されていた黒の帯を締めたと考えられる。